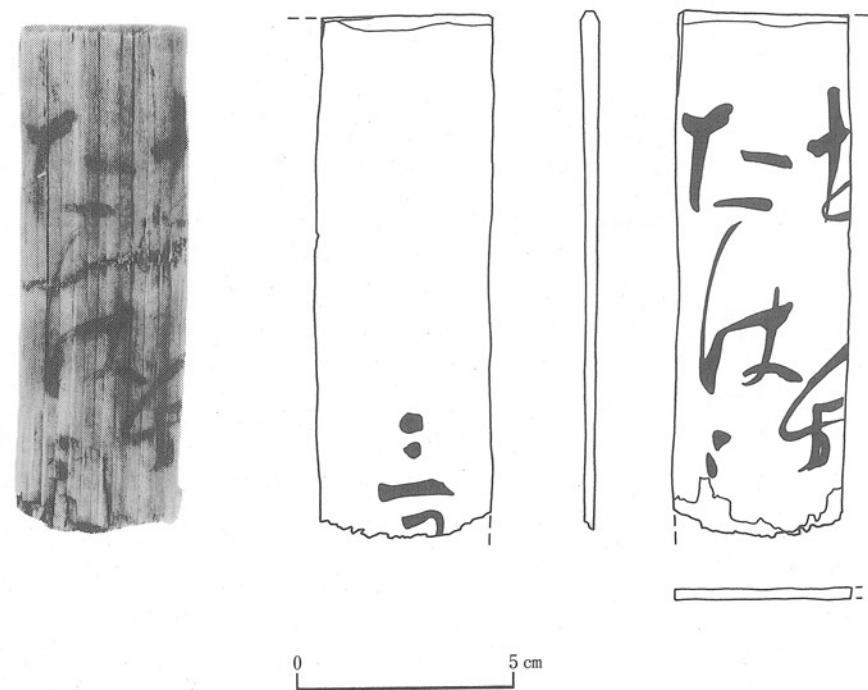
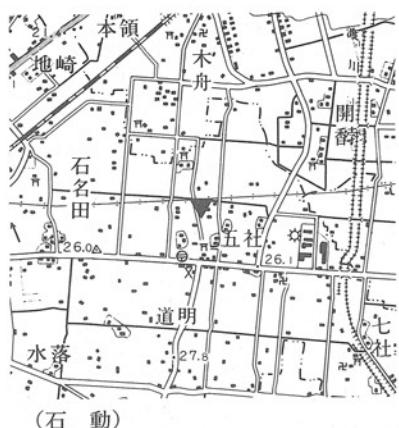


1995年出土の木簡



## 富山・五社遺跡



(石動)  
る砺波郡一二郷中の「長岡」  
庄川によって形成された砺  
波平野の扇央部西端に位置  
し、小矢部川と岸渡川に挟  
まれた自然堤防に立地する。

- 1 所在地 富山県小矢部市五社  
2 調査期間 A地区 一九九二年七月～一九九三年三月  
C1地区 一九九二年九月～一月  
3 発掘機関 財富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所  
4 調査担当者 河西健二・横山和美・中川道子・越前慎子・三島  
道子・柴口真澄（A地区）、池野正男・谷杉廷子  
（C1地区）

5 遺跡の種類 集落跡  
6 遺跡の年代 五世紀後半～一四世紀

### 7 遺跡及び木簡出土遺構 の概要

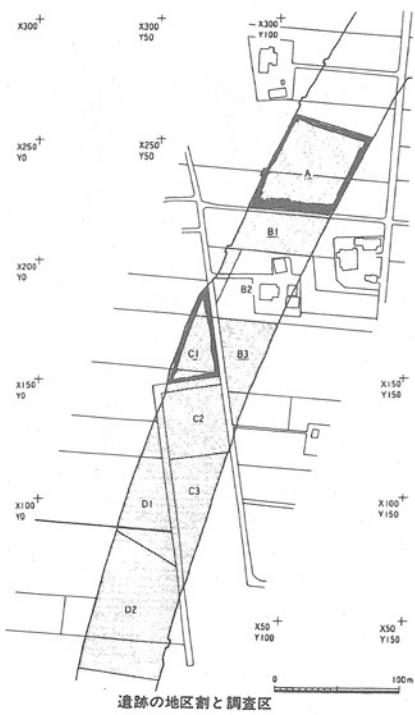
五社遺跡は、小矢部川と

庄川によって形成された砺  
波平野の扇央部西端に位置  
し、小矢部川と岸渡川に挟  
まれた自然堤防に立地する。

郷」の一部と推定され、中世には五社地内に所在する糸岡神社を中心として周囲に後堀河天皇の皇女室町院の荘園「糸岡庄」があったとされている。またこの北には、天正一三年（一五八五）の白山地震によって倒壊したという木舟城跡がある。

調査は能越自動車道建設に先立ち一九九二年度から一九九四年度に実施した。遺跡は県道戸出・小矢部線から北東に五〇〇m、路線幅六〇mで、便宜的に地区割りを行なって調査した。その結果、古墳時代から中世にわたる複数の文化層で遺構を確認した。

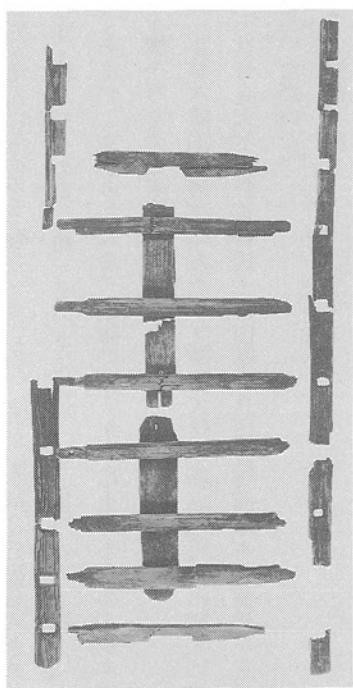
A地区では中世・古代（上下二面で、うち下面は古墳時代も含む）の遺構検出面を確認した。中世面では掘立柱建物一棟・溝一三条・土坑約五〇基を検出しており、一二世紀後半から一三世紀を主体と



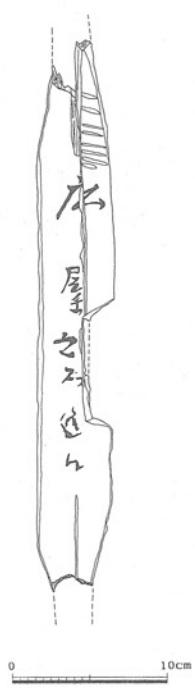
C1地区では、中世面で掘立柱建物七棟・溝・井戸・土坑、古代面で掘立柱建物四棟・柵列・溝・土坑を検出している。中世面の掘立柱建物は地区の南西部に六棟（SB01～SB06）、中央部東

する。掘立柱建物の柱穴にはその底部が古代上層面まで掘られているものがあるが、天正一三年に一帯を襲った白山地震と飛越地震の影響によつて、柱穴の上部と底部の位置がずれ、その底部を古代上層面において移動した地点で検出したものもある。遺物は土師器、白磁、珠洲、瀬戸美濃、羽口などが出土している。古代上層面では掘立柱建物数棟・溝一〇条・土坑数十基を検出しており、一〇世紀から一一世紀に主体をおくと考えられる。遺物は土師器、須恵器、漆器椀が出土している。古代下層面では掘立柱建物三棟・溝・畠跡・道状遺構、古墳時代の竪穴住居三棟・溝四条・自然河川一条・土坑八基を検出している。遺物は古墳時代から古代にかけての土師器・須恵器が出土する。地区の西端で検出した自然河川SD五五二からはVI-C層で大足の縦枠・横木・足板が一×二mの範囲にバラバラに重なつた状態で出土した。部材の数から復原を試みたが、現時点では一個体分か二個体分かは不明である。横木の一つに墨書きが認められた（木簡①）。また同層上面からは平安時代の遺物が、中位（大足とほぼ同レベル）からは七世紀初めの須恵器甕が出土するため、遺構の時期は七世紀から九世紀と考えられ、大足もこの時期に比定される。

1995年出土の木簡



大足



(1)

(1) 「庄カ」  
□□□□□□□

(358)×50×12 061

に一棟(SB〇七)を検出している。SB〇一は三間×三間の総柱で北側に廂をもち、区画溝SD一二〇を伴うと考えられる。柱穴SB〇七からは呪符木簡(2)と箸が、他の柱穴からは漆器椀などが出土している。またSB〇七の柱穴からも墨書の有無は未確認であるが、下端を尖らせた板状の木札が出土している。

#### 8 木簡の収集・内容

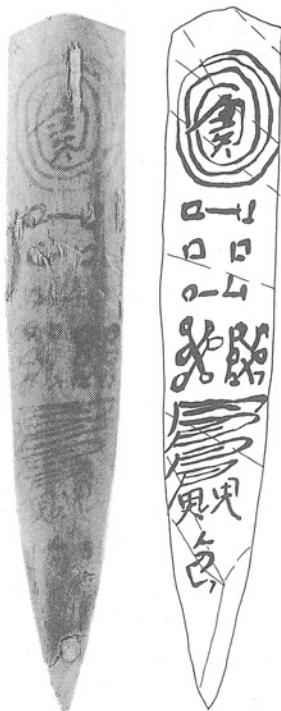
(2) 「(符籙) □□」

180×30×5 051

(1)は大足の横木である。墨書は七文字と思われ、最初の文字は「庄」と考えられるが以下は判読できない。形状は板状の材の両端を削りだし、打抜きほぞと考えられるが、端部は欠損している。

一文字目の上方に文字と平行して傷がみられるため、ほぞは縦枠のほぞ孔に挿入されていたものと考えられる。また中央部には、足板をのせるため一側面からの抉りがみられる。文字の位置については、上二文字は横木の幅の中央部にあるが、抉り部分に書かれた三文字目以下はやや左寄りにあるため、大足として作られた後に墨書されたものと推測される。

(2)は呪符木簡である。形状は長方形の材の頭部を緩やかな山状に削り、下端は尖らせている。表面には上から下へ削った痕跡がみられる。墨書は、上から三重丸の中に文字を書き、その下は□と□を



線で結んだものを三段並べている。次に□を縦に三段並列させて斜線で結んだものを二組、その下に「戸」を四段、「戸」以下は不明であるが二文字みられる。建物の柱穴から出土したため、鎮宅安寧を願つたものと考えられる。

なお木簡(1)の解説にあたり立命館大学本郷真紹氏、木簡(2)については奈良大学水野正好氏・富山県立立山博物館木本秀樹氏からご教示いただいた。

## 9 関係文献

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所『埋蔵文化財年報

4』(一九九三年)

同『埋蔵文化財年報5』(一九九四年)

同『埋蔵文化財調査概要 平成7年度』(一九九六年)

(横山和美・山元祐人)

## 新潟・寺町遺跡てらまち

1 所在地 新潟県中頸城郡吉川町大字六万部字寺町・大字町  
田字上寺町

2 調査期間 一 一九九三年(平5)五月～一〇月  
二 一九九五年八月～一月

3 発掘機関 吉川町教育委員会

4 調査担当者 桑 繁治

5 遺跡の種類 集落跡・官衙跡か

6 遺跡の年代 縄文時代早期～前期、八世紀～九世紀、一〇世紀  
後半～五世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構

## の概要

寺町遺跡の西側と南側は

沖積平野が広がり、約一・五km先は標高五m未満の大

潟低地となっている。沖積

平野と日本海の間には潟町砂丘が延びている。南東の

